

老執事の笑えぬ冗談 ——『日の名残り』の深淵に見る倫理的問い

岩 崎 雅 之*

序論

“[T]he abyss beneath our illusory sense of connection with the world” (Nobel Prize) を明らかにしたとして、2017年、カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) がノーベル文学賞を受賞した。¹ 19世紀的なリアリズムと、20世紀モダニズム文学を混交させたような独自性を持つイシグロの小説は、常に革新的な文体によって綴られ、他の追随を許さぬ唯一無二の世界を創り上げていると論評される。受賞に至るまでの彼の長編小説家としての歩みを簡単に振り返ってみると、まず、戦後の日本を舞台にした『遠い山なみの光』 (*A Pale View of Hills*, 1982) と『浮世の画家』 (*An Artist of the Floating World*, 1986) を出版し、続いてイギリスを舞台とした『日の名残り』 (*The Remains of the Day*, 1989) を世に出し、見事ブッカー賞に輝く。その後、カフカ的なシュールレアリズムの世界を描いた『充たされざる者』 (*The Unconsoled*, 1995)、ヴィクトリア朝的教養小説と探偵小説の形式を組み合わせた『私たちが孤児だった頃』 (*When We Were Orphans*, 2000)、SF的要素を取り入れ生命倫理の主題に取り組んだ『わたしを離さないで』 (*Never Let Me Go*, 2005)、ブリトン人とサクソン人の世界を描いた『忘れられた巨人』 (*The Buried*

* 福岡大学人文学部講師

Giant, 2016) を発表し、ノーベル文学賞受賞によって世界的名声を不動のものとした。

作家として歩み始めた当初から、イシグロはローカルでありながらもグローバルな小説家だと認識されてきた。現代イギリス小説の代表格であるイアン・マキューアン (Ian McEwan) やグレアム・スウィフト (Graham Swift) とともに、信頼できない語り手²を好んで用いるために、エミリー・ホートン (Emily Horton) は彼を、1980年代のニュー・ライトと新自由主義に象徴される、ポスト・コンセンサス時代の危機を描く作家だと論じている(1)。その一方で、ピコ・アイヤー (Pico Iyer) は、イシグロがベン・オクリ (Ben Okri)、マイケル・オンダーチェ (Michael Ondaatje)、ヴィクラム・セス (Vikram Seth)、ティモシー・モー (Timothy Mo) らとともに、アングロ・サクソンの祖先を持たぬ、英語で小説を執筆する世界文学者の一人であると論じ、帝国主義的なヒューマニズムの理想像、またそれが標榜する普遍的真理や理性を退け、グローバルな状況における人権と市民精神^{シティズンシップ}を求める作家であると言う (qtd. in Horton 27)。

第二次世界大戦後の状況を、ローカルのみならず国家という枠組みを越えたグローバルな視点で描いてきたイシグロは、「略奪者も犠牲者も存在しない世界」とノーベル賞委員会が評する『日の名残り』で、一躍、注目を集めた。この作品はカントリー・ハウス小説という、「正統な」英国的主題を扱うジャンルに分類されるが、語り手である老執事スティーブンスが、あまりにも形式張った言葉遣いで第二次世界大戦前後の自身の半生について語るために、このジャンルのパスティーシュになっていると考えられている。実際、イシグロ自身、ウッドハウス (P. G. Wodehouse) のジーヴス・シリーズに代表される執事 (正確に言うとジーヴスは従僕だが) が活躍するような、古き良きイングランドの神話的風景を描く作品群を、政治的な次元から書き直そうとしたと告白している (Vorda and Herzinger 73)。では、信頼できない語り手というナラ

ティヴを用い、1980年代にカントリー・ハウス小説のパスティーシュを作り出したことには、はたしてどのような意義を見出すことができるのだろうか。

本稿は、イシグロの『日の名残り』を20世紀カントリー・ハウス小説と比較し、スティーブンスの覗き込んだ深淵に見えるものの正体を明らかにする。言い換えるならば、物語の舞台とされる1956年に、執事スティーブンスが新しいアメリカ人の雇い主の下で働き始め、1920~30年代を回顧することには、小説が出版された1980年代の危機的状況がどのように反映されているのだろうかという問いに、モダニストによるカントリー・ハウス小説の系譜を辿りながら答えるというものである。このことにより、本作のローカル性、グローバル性が明らかになるだろう。

1. 英国的「偉大さ」の虚ろさ

まず『日の名残り』のあらすじをみておこう。物語の現在は1956年の8(～9)月である。オックスフォード地方にあるカントリー・ハウス、ダーリントン・ホールに勤める執事スティーブンスは、雇い主であるアメリカ人の富豪ファラディに勧められ、フォードに乗ってひとり自動車旅行に出かける。この旅の表立った目的は、ダーリントン・ホールの使用人不足問題を解消するために、かつての同僚であったミス・ケントンに打診しに行くというものであったが、物語が進むにつれ、彼の心の奥底には、ミス・ケントンに対する淡い恋心が長年にわたって存在していることが明らかになる。

二人は同時期にダーリントン卿というイギリス人貴族に仕えていた。この雇い主は1920~30年代にドイツに対する宥和政策を推し進め、結果としてヒトラーに欺かれるという過ちを犯した人物であり、第二次世界大戦後にはイギリス国民から大罪人として糾弾された。戦後、ダーリントン卿は新聞社を相手取り、自身の名誉回復に奔走したが叶わず、失意のうちにこの世を去った。スティーブンスは回想の中で、当時の雇い主のことを道徳的巨人であったと述

べ、現在においてもなお彼を敬愛していることを告白する (132)。雇い主がナチズムに感化され、自らもその非人道的行為に加担してしまったことにステーブンスは少なからず良心の呵責を覚えているようであるが、第二次世界大戦が終結してもなおその過ちを認められず、日々、自己を正当化しながら新たな雇い主の下で戦後史を生きている。物語の結末で、ステーブンスはミス・ケントンの雇用を諦め、代わりに自分がファラディにとってより有能な執事になるために、アメリカン・ジョークを身に付けることを決心し、この新たな思いを胸に、一人、ダーリントン・ホールへの帰路に就くのであった。

自動車旅行の初日に訪れたソールズベリで、ステーブンスはまず、うねりを見せながらどこまでも緩やかに続いて行く田園風景に目を奪われる。彼は、『ナショナル・ジオグラフィック』が紹介する、見る者が思わず息を飲むような絶景と対立するものこそが、イングランドの美しい風景だと述べ、その偉大さについて次のように語る。

And yet what precisely is this “greatness”? . . . I would say that it is the very *lack* of obvious drama or spectacle that sets the beauty of our land apart. What is pertinent is the calmness of that beauty, its sense of restraint. (29)

ステーブンスにとって、静かなる美の佇まいに見られる劇的要素の「欠如」こそが、イングランドの田園風景の持つ偉大さの源泉であり、そのような「品格」(dignity) を欠くアフリカやアメリカの自然風景は、偉大なるブリテンの景色には遠く及ばないのだと言う。

ステーブンスが旅行の案内書とするのは、ジェーン・サイモンズ夫人の『イギリスの驚異』(*The Wonder of England*) である。1930年代に出版された、7巻にもわたる本書は、挿絵付きでイギリス諸島各地の風景の鑑賞方法を指南

する、いわば手引書である。スティーブンスは出発前に、『デヴォン・コーンウォール』の巻を手に取り、大戦中のドイツの空爆によって、イングランドの地形が大きく変えられたということはないのだから、この本が数十年前に書かれたものであったとしても、現在でも十分通用する代物のはずだと述べる（11-21）。実際、彼はこの『イギリスの驚異』のすすめに従い、ソールズベリ大聖堂を訪れ（40）、ウェイマスでは遠回りをしてまでして、夫人が賛美する田園風景を鑑賞する（330）。ライアン・トリム（Ryan Trimm）が指摘するように、設定上、この書籍が1930年代に出版されているということから、本書が第一次世界大戦前から大戦中にかけて市場に溢れかえっていた、イングランドの田園とそのイングリッシュネスのイメージを紹介した出版物の名残りであることがわかる（194）。このような出版物は、モダニティや第一次世界大戦、世界恐慌への不安を反映して数多く生産されたもので、帝国主義的愛国心を強化する、イングリッシュネスに関する言説を社会に流通させた。

だが、当時のモダニズムの動向を踏まえてみると、サイモンズ夫人の書籍が時流に逆行する言説であることがわかる。ジェド・エステイ（Jed Esty）がコリン・マッケイブ（Colin MacCabe）に倣って述べているように、1930年代はイングリッシュネスに関する人類学的転回が起こった時期であった（2）。植民地の独立運動、コモンウェルスの誕生、大恐慌によるレッセ・フェールの経済政策の修正とともに、島国としてのイングリッシュネスが求められ、後の福祉国家に繋がる小英国主義への転換がなされた。1920年代から際立った文学的潮流を生み出していたモダニストたちは、この時期の変化を機敏に感じ取り、こぞって野外劇を生み出している。その代表例として、エリオット（T. S. Eliot）の「岩」（“The Rock,” 1934）、フォースター（E. M. Forster）の「アビンジャー・パジェント」（“Abinger Pageant,” 1934）と「イングランドの心地よい土地」（“England’s Pleasant Land,” 1940）、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）の『幕間』（*Between the Acts*, 1941）が挙げられる。これらの作品は、

過去から現在にかけて紡がれてきた歴史の連続性を主題とする。例えば、フォースターの「アビンジャー・パジェント」では、木こりが自然と共に連続と続く人間の営為によってのみ田舎は創られる、と語る（349）。もはや、大戦までに盛んに提唱されていた普遍的なイングリッシュネスは求められず、代わりに小さな島国としてのイングランドの姿を模索する機運が生まれていたのだった。³ このような社会的・文学的動向を踏まえて考えてみると、当時の野外劇の表象するイングリッシュネスがローカルなものであったのに対し、ステューブンスが鑑賞しようとしている田園風景は、大戦の影響すら受けない、普遍／不変的なイングリッシュネスのイメージであることが理解される。

2. カントリー・ハウス小説としての『日の名残り』

このように、イングランド各地を旅行しながら、イングリッシュネスのイメージを享受するステューブンスだが、奇妙なことに、ダーリントン・ホールの外観については一切言及しない。2世紀にわたりダーリントン家がこの屋敷を所領していたことや、かつてステューブンの下で17人の雇人が働いていたこと（15）、また、その間取り（居間、宴会場、書斎、読書室、食器室、ビリヤード室、大階段など）や内装、調度品に関する言及は存在するが、このカントリー・ハウスがどのような様相を呈し、周囲にどのような地形が広がっているのかは明らかにされない。なぜ、このような欠落が存在するのであろうか。

『日の名残り』が属するカントリー・ハウス小説というジャンルは、貴族やジェントリーの住む邸宅を舞台とし、その建築物とイングランドの田園風景をナショナル・ヘリテージとして表象するものであり、ジェーン・オースティンの作品にその範を求めることができる。『日の名残り』が出版された20世紀に限って言えば、フォースターの『ハワーズ・エンド』（*Howards End*, 1910）やイーヴリン・ウォー（Evelyn Waugh）の『ブライズヘッド再訪』（*Brideshead Revisited*, 1949）がしばしばその代表格として挙げられる。『ハワーズ・エンド』

は20世紀英国において、物質主義的帝国主義とヒューマニズム的自由主義をいかにして共存させるかを主題とした作品で、その物語の中心に存在していたのが、ロンドン郊外に建てられたハワーズ・エンドという元農場屋敷であった。ライオネル・トリリング（Lionel Trilling）は、この屋敷の継承者をめぐる本作の主題を、誰がイギリスを受け継ぐか、という言葉で要約している（102）。その後1944年に出版された『ブライズヘッド再訪』は、二度の世界大戦を通じ、カントリー・ハウスがもはや英国の象徴たり得ない状況にあることを描いている。フライト家という貴族の所有物であったブライズヘッドは、一家の離散および没落のために、第二次世界大戦中にイギリス陸軍に占拠され、軍事目的に利用されるという憂き目に遭う。ウォーの作品は、イングリッシュネスを象徴するカントリー・ハウスが、もはやイングランドの精神的支柱とはなり得ないことを描いており、そのため、カントリー・ハウス小説の系譜はこの作品で終焉を迎えたと論じられる。だが、興味深いことに、イシグロの作品は、カントリー・ハウス小説に終止符を打ったとされるウォーの作品に類似していると言われる（Kalliney 72）。

一言でカントリー・ハウス小説と言っても、そのナラティブは多種多様である。例えばフォスターの『ハワーズ・エンド』は、時としてメタナラティブのように介入する語り手を登場させていたが、基本的には第三人称の語りでナショナル・ヘリテージの継承者をめぐる問題を描いていた。『ブライズヘッド再訪』では、陸軍士官のチャールズ・ライダーが、過去のイングランドへの郷愁を交え、一人称で語っている。ピーター・カリニー（Peter J. Kalliney）が論じる通り、『ハワーズ・エンド』と『ブライズヘッド再訪』は、カントリー・ハウス小説の標準化された約束事を踏襲しながら、都市と田園の対立の解消の可能性を模索し、カントリー・ハウスの文化的指標を再考するものであった（41-68）。特にフォスターは、このジャンルを用いて中産階級内の闘争を描くために、ハワーズ・エンドを単にイギリスの神話的過去の象徴とするだけで

なく、この建物こそが社会的・政治的対立を伝える存在であることをほのめかしている。カリニーに従えば、フォースターはモダニティによって存続が危ぶまれるカントリー・ハウスの表象を通じ、イギリスのナショナル・アイデンティティの再定義を図っているのである。一方の『ブライズヘッド再訪』は、語り手ライダーの記憶における自身の青春時代と、過去のイングランドへの郷愁を主題としたものである。大学時代の友人セバスチャンは、貴族であるフライト家の出身であり、その家系は代々ブライズヘッドを所領としてきた。だが、社会変動の影響を強く受け、一家は離散し、次世代の後継者が誕生しないまま第二次世界大戦に突入する。ライダーが所属する連隊は、労働者階級出身のフーパーという若い軍人が指揮を取り、ナショナル・アイデンティティの象徴であったブライズヘッドを貴族階級の手から奪い、労働者階級から成るイギリス陸軍の連隊の拠点とするのであった。

ダーリントン・ホールの外観には言及しないものの、スティーブンスは、上述の2作品と同じように、イングランド各地のナショナル・ヘリテージに大きな変化が起きていることを伝える。旅の途中で彼が目にした、退役軍人の所有するヴィクトリア朝風の屋敷では、古い馬車道が車道に変わっており、屋敷内の半分ほどには防塵シートがかけられている(124)。また、コーンウォールのローズ・ガーデンというホテルは、元々、ある荘園領主のマナーハウスであったが、第二次世界大戦後に改築され、一般客向けの宿泊施設に変わっている(215)。ナショナル・ヘリテージが没落の途上にあることや、商業施設に変容したりしていることは、ダーリントン・ホールがグローバルな資本の消費の対象となり、アメリカ人であるファラディに購入され、使用人の数が減らされている点と対応する。物語の結末に登場する無名の元執事が述べているように、カントリー・ハウスはもはやアメリカ人しか維持することのできないイギリスのナショナル・ヘリテージであり(348)、グローバリズムに順応した形でしか存続を望めないのである。

このように考えると、外観の描写されないダーリントン・ホールが、カンントリー・ハウス小説に登場するナショナル・ヘリテージとしての典型的なイングリッシュネスのイメージ、すなわち記号としてしか機能しない存在であることがわかる。ダーリントン・ホールも、フォースターとウォーの描くような階級（内）の対立を象徴する存在として描かれていることには違いないが、詳細を欠いた典型的イメージであることにより、イングリッシュネスのイメージを強化している。この点においては、スティーブンスが数十年前の書籍を引っ張り出して来てまでして鑑賞しようと躍起になっていた、郷愁の中のイメージとしてのイングランドの田園風景と、本質的に変わらないのである。

3. スティーブンスの笑えぬジョーク

イングリッシュネスを追い求めるスティーブンスは、物語の中で一貫して、偉大な執事とはどのような存在なのだろうかと問う。一流の執事とは、自己抑制、すなわち私情の排除によって得られる品格を備えた存在だと言われる(33)。その具体例として、スティーブンスは自分の父親を挙げる。スティーブンスの兄レナードが南アフリカ戦争の悪名高い作戦で命を落とし、父が勤めていた職場に偶然その作戦の指揮者がやって来た時も、父は感情を乱すことなく、職務を全うしたと言う(41)。父親の職業への専心ぶりが示す通り、品格とはいついかなる状況においても職業的あり方（professionalism）を投げ出さないことだと定義される。また、この父親は、息子であるスティーブンスにある逸話を再三にわたって説き聞かせている。インドに滞在する、とあるイギリス人の下で働く執事が、雇い主とその招待客に一切不安な思いをさせることなく、邸宅に侵入してきた虎を表情一つ変えずに仕留めたというものである(36-37)。この逸話は、執事の理想像がいかなるものかを伝えるだけではなく、品格という概念が大英帝国のイデオロギーと不可分の関係にあり、スティーブンス父子のような紳士階級への盲目的な奉仕者が、自己犠牲によって、帝国の植

民地支配の正当化に加担していることを伝えている。そのことを裏付けるように、スティーブンスは、感情に流され易い大陸のヨーロッパ人やケルト人には品格を身に付けることができず、それは自分のようなイギリス人の特権なのだと述べている（44）。

しかし、三日目に訪れたデヴォン州タヴィストック近くのモスクムで、労働者階級のハリー・スミスという人物が、スティーブンスの品格論に異議を申し立てる。スミスは紳士階級だけでなく（この場面で、スティーブンスは服装と言葉遣いから紳士と勘違いされている）、自分たちのような一般市民にも品格はあると述べる。

“That’s what we fought Hitler for, after all. If Hitler had had things in his way, we’d just be slaves now. . . And I don’t need to remind anyone here, there’s no dignity to be had in being a slave. That’s what we fought for and that’s what we won. We won the right to be free citizens.”（196）

ここでスミスの言う、品格を失った奴隷とは、ナチスのシンパであったダーリントン卿に、盲目的に奉仕してきたスティーブンスのことを言い当てている。帝国のイデオロギーに支配され、間接的にであれ無批判的にファシズムを肯定してしまったスティーブンスは、その罪過から逃れることはできない。スティーブンスが自らを幽閉していたダーリントン・ホールの外では、ダーリントン卿がファシズムに傾倒してまで否定しようとしていた労働者たちによって、新しい時代の民主主義が作り上げられており、自己欺瞞の中で生きてきたスティーブンスは、いつの間にかダーリントン・ホールとともに、自分が時代から取り残された過去の遺物、さらに言えば負の遺産となってしまったことに気付くのだった。

しかし、スミスの主張は、この村に住むカーライル医師に論破される。カー

ライルは、スミスの政治意識が共産主義と保守主義が混在する支離滅裂なものであると述べ、その危うさを指摘する（219）。元々カーライルは、社会主義の信条の下に国民医療の普及を果たすべく、1949年にモスクムにやって来たが、村民は時代に合わせた変革を求めず、カーライルの意思を挫く（220-21）。この医師の失敗は、まるで戦後の福祉国家イギリスの歩みそのものである。戦後、「ゆりかごから墓場まで」をスローガンに掲げたイギリスは、国民保険サービス（NHS）を開始し、福祉政策の充実化を図った。この時期は、保守党と労働党が同意を結んだ、いわゆるコンセンサス政治が執られていたが、資本・技術の海外流出、高率の所得累進課税によって引き起こされた勤労意欲の低下、1973年の第一次オイルショックなどにより、「英国病」が深刻化し、1976年には国際通貨基金（IMF）の援助を受けるまでに経済力が低下した（板倉 155）。社会保障費は増加の一途をたどり、インフレが進み、1978-79年には「不満の冬」が訪れた。この文脈から見ると、モスクムの村民は、1970年代の不況下で繰り返しストライキを行った労働者を連想させる。その後、『日の名残り』が出版された1980年代には、保守党党首マーガレット・サッチャーが首相となり、ニュー・ライトおよび新自由主義経済を骨子とした政策を導入する。「小さな政府」による市場主義経済の推進、国営企業の民営化などにより英国病からの早期回復が図られたが、結果として社会的・経済的エリートの力を強め、社会の分断を強める事態を招いた。国民の間でサッチャー政権に対する不満と不信感が募り、そのため、それらが『日の名残り』のような「クライシス・フィクション」を生み出したのだとエミリー・ホートンは主張する（9-10）。

では、サッチャー政権下で発表された『日の名残り』は、最後にどのような結末を提示しているのであろうか。コーンウォールでミス・ケントンと再開を果たしたステイブンスは、彼女が現在の生活に満足しており、ダーリントン・ホールに戻るつもりは毛頭ないことを悟り、半ば茫然自失とした状態でウェイマスにやって来る。遊歩栈橋では、見知らぬ他人同士が冗談を言い合

い、イルミネーションの点灯を喜んでいた。それを見たスティーブンスは、ふと、人間同士を結び付ける鍵は冗談にあるのかもしれないと考える。その時に偶然言葉を交わしていた元執事の“You've got to enjoy yourself. The evening's the best part of the day” (256) という言葉に触発され、彼は新しい雇い主であるファラディの求めに応じ、ジョークの訓練の再開を決心する。だが、ここで彼が体得しようとしているアメリカン・ジョークは、決して笑い飛すことのできる類のものではない。スージー・オブライエン (Susie O'Brien) が指摘する通り、ファラディが得意とするアメリカン・ジョークは、いわばアメリカの「言語」であり、それを習得するということは、すなわち、新世界の秩序への順応を意味するのだった (792-3)。同様に、河野も、「人生の晩年を楽しめ」という無名の老人の発言とスティーブンスの反応に、福祉国家からの脱却とアメリカニズムに象徴される新自由主義的な労働への推移を見ており、この言葉がスティーブンスにとっては「ポストフォーディズム的=新自由主義的な命令」であるのだと解釈している (101)。

ここで最後に、イギリスの戦後史を確認しておきたい。スティーブンスがアメリカニズムへの順応という道を進み始める決心をする 1956 年は、スエズ戦争を通じ、イギリスがアメリカとソ連に世界の覇権を委譲した象徴的な年であった。民族自決の機運の高まりを背景として、この年の 7 月に、エジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化を宣言したため、イギリスはフランス・イスラエルと連携を取り、同年 10 月に戦争を開始した。しかし、イギリスの軍事侵攻は国際的な批判を浴び、最終的に米ソの介入により、中止を迫られた。そのため、この戦争は、大英帝国の終焉とイギリス病の始まりを象徴する事件となったと論じられる (麻生 3)。⁴ ファラディが、スティーブンスに自動車旅行を勧める際に口にした、「ガソリン代はわたしが持つ」(4) という言葉は、アメリカがイギリスに変わり中東情勢の調停者となり、石油を支配する立場になったことを暗示していたのだった。

米ソの冷戦構造は、スエズ戦争によってイギリスの立場を明らかにしたが、両国の対立は、『日の名残り』が出版された1980年代においても続いていた。もはやアメリカのジュニア・パートナーにならざるを得なくなった状況において、イギリス国民は新自由主義にどのように対応するかが問われていたのだった。戦後問題を抱えながら、グローバリズムの時代を生きる執事スティーブンスについて、イシグロは次のように述べる。

The butler is a good metaphor for the relationship of very ordinary, small people to power. Most of us aren't given governments to run or coup d'états to lead. We have to offer up the little services we have perfected to various people: to causes, to employers, to organizations and hope for the best – that we approve of the way it gets used. (Swift 37)

スティーブンスとダーリントン卿／ファラディの関係は、一般市民と権力の関わり合いの比喩とされる。つまり、スティーブンスの姿は、グローバル社会を生きる我々一人一人の姿と重なるのだ。新自由主義時代の要請に応えるべく、最終的にスティーブンスはアメリカニズムへの順応という結論に達するが、彼がダーリントン卿の共犯者であったこと、また、戦後、ファシズムに加担した罪から逃れてきたという責任問題は、依然として解決されないままに残る。それは同時に、戦後史を生きる私たちの問題でもあるのだ。

結論

イシグロは、『日の名残り』の舞台を1920年代～1950年代に設定し、大英帝国の衰退および終焉と、それとともに理想化されてきたイングリッシュネスの虚ろさを、郷愁と皮肉を交えて描き出した。『日の名残り』の主題は、戦後のグローバリズムの時代をいかに生きるべきかという倫理的な問いにあり、そ

れは常に開かれた問いとして私たちに訴えかけている。欺瞞と虚飾によって、真実から目を逸らして戦後史を歩んで来たスティーブンスと世界の繋がりの下にひそむ深淵を覗き込むとき、私たちはそこに、自分たちの姿をも見るのである。

¹ 以下、ノーベル賞委員の言葉はすべて“The Nobel Prize in Literature 2017 – Presentation Speech”からの引用である。

² デイヴィッド・ロッジ (David Lodge) によれば、イシグロ作品に登場する信頼できない語り手は、自他に関わる真実から目を逸らしながら人生を歩んできているが、自己正当化と申し開きを行いながら、真情を告白する (155)。

³ 1930年代のイングリッシュネスとモダニズムに関しては、拙論『『幕間』における「わたしたち」の〈共生〉』を参照。

⁴ 昨今では、このような見方に加え、実はイギリスが軍事核政策、外交文化、さらには福祉政策を通じ、冷戦イデオロギーの展開に貢献したと主張する修正主義も登場している (麻生4)。

引用文献

麻生えりか「孤独な執事の旅行記——冷戦小説として読むカズオ・イシグロの *The Remains of the Day*」『ヴァージニア・ウルフ研究』日本ヴァージニア・ウルフ協会、第35号、2018年、1-23頁。Print.

板倉巖一郎「スクール・オブ・パンク——パンク・サブカルチャー再考」川端康雄他編『愛と戦いのイギリス文化史 1951-2010年』慶応義塾大学出版、2011年、153-68頁。Print.

岩崎雅之「『幕間』における「わたしたち」の〈共〉性」日本ヴァージニア・ウルフ協会、第33号、16-31、2016年、1-23頁。Print.

河野真太郎「カズオ・イシグロの始まらない戦後」『ユリイカ カズオ・イシグロの世界』第49巻第21号、青土社、2017年、95-102頁。Print.

Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton: Princeton UP, 2004. Print.

- Forster, E. M. "Abinger Pageant." *Abinger Harvest and England's Pleasant Land*. Ed. Elizabeth Heine. London: Deutsch, 1996. 333-49. Print.
- Horton, Emily. *Contemporary Crisis Fictions: Affect and Ethics in the Modern British Novel*. London: Palgrave Macmillan, 2014. Print.
- Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: Faber, 2010. Print.
- Kalliney, Peter J. *Cities of Affluence and Anger: A Literary Geography of Modern Englishness*. Charlottesville: U of Virginia P, 2006. Print.
- Lodge, David. *The Art of Fiction*. New York: Penguin, 1992. Print.
- "The Nobel Prize in Literature 2017 – Presentation Speech." *Nobel Prize.org*. Nobel Media AB2014. Web. 16 Dec. 2018. https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/2017/presentation-speech.html.
- O'Brien, Susie. "Serving a New World Order: Postcolonial Politics in Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*." *Modern Fiction Studies* 42.4 (1996): 787-806. *Proquest*. Web. 10 Dec. 2018.
- Swift, Graham. "Shorts: Kazuo Ishiguro." "An Interview with Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. Jackson: UP of Mississippi, 2008. 35-41. Print.
- Trilling, Lionel. *E. M. Forster*. London: Hogarth, 1967. Print.
- Vorda, Allan, and Kim Herzinger. "An Interview with Kazuo Ishiguro." *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. Jackson: UP of Mississippi, 2008. 66-88. Print.